

とあるデートの乱雑物 語 〈インデアライブ〉

タルト・タタン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第1章あらすじ

第三次世界大戦の後フィアンマが迷い込んだ世界は、

精霊の存在する世界だった！

懲りず、世界を救おうとするフィアンマに土道はどう挑むか!?

第2章あらすじ

最終兵器、土道を喪ったラタトスクが巻き込まれるのは、天宮市の闇

『暗部戦争』だった！

精霊と化学と魔術が交差するとき物語は始まる。

目次

設定	1
神の右席の救済編 土道ウェイキング	
1話 ファインマの覚醒	6
2話 ファインマVS精霊	12
3話 神の右席VS精霊＋土道	
17	
4話 神の右席(術式発動)VS精霊	
22	
5話 押し始める精霊達と集う猛者	
30	
6話 完成する神上 覚醒する士	
道	35
6・5話 反転を感じ取る精霊たち	
倒れる右席たち	44
7話 暴かれる過程と崩れゆく結果	
53	
8話 救われないお前を救ってやる！	59
最終話 ベツレヘムの星と土道	
67	
暗部戦争編 土織ウイザード	
プロローグ 動き出す暗部組織	76
1話 忘れられた精霊と魔術師になっ	

たヒーロー | 80

2話 魔術師と精霊と救済する者

86

3話 表の暗部と裏の暗部 | 94

4話 捜査と妨害 | 98

5話 スクールと精霊 | 102

6話 t r a p t o u s e m e

m b e r | 113

7話 精霊と能力者 | 118

8話 素粒子工学研究所『スクール』①

| 125

設定

設定

右方のファイアンマ

ー第三次世界大戦後、アレイスターに腕を切り裂かれて死にかけていたとき、オツレルスが来た後のファイアンマ。

そしていつの間にかデート・ア・ライブの世界に転生してた。

何故かデート・ア・ライブの世界の歴史を全て知っている。

ミカエルを宿す。『聖なる右手』を扱う。

転生のせいかな、あんまり反省してない。

後方のアツクア

ーファイアンマと同じく天使「ガブリエル」と戦って倒れたあと転生して来た。

ガブリエルを宿す。『聖母の慈悲』を扱う。

何故かファイアンマに従う。

左方のテツラ

ーアックアに殺されたあとに転生しているので1ヶ月ぐらいデート・ア・ライブの世界を にいる。ラファエルを宿す。

《光の処刑》は弱点、以外欠点はない。

何故かファイアンマに従う。

前方のヴェント

ー第三次世界大戦の後に転生して来た。

『天罰術式』はかなりの悪意を感じ取らないと発動しない。ウリエルを宿す。

何故かファイアンマに従う。

デート・ア・ライブの時系列

ー五河ダイザスターの3日後ぐらい

五河士道

ーデート・ア・ライブの主人公。

昔親に捨てられ五河家に引き取られた少年。

フィアンマが能力を使ったことよって、霊力が逆流したかと思いきや、霊力は士道の中にある。

夜刀神十香

ーデート・ア・ライブのヒロイン1号。

夜色の髪的美少女。

士道ときな粉パンが大好き。

四糸乃

ーライトブルーの髪にサファイアのような瞳をもつ少女。

人見知りでいつも話したいるのはパペットのよしのん。

士道と士道のご飯とよしのんが好き。

五河琴里

ー五河士道の義妹であり、炎の精霊イフリート。

白リボンの琴里は無邪気な性格だが、黒リボンになるとツンツンしてしまう。でもおにーちゃん大好き。

八舞 耶俱矢

ー来禅高校の修学旅行先の或美島で士道が出会った精霊。

真の八舞としての生き残りをかけて、

もう一人の精霊・夕弦と「土道を『魅力』で落とす」勝負をする。

八舞弓弦

ー 耶俱矢と同じく、土道が或美島で出会った精霊。

土道によつて封印された今となつては、

耶俱矢のことをよくからかっている。

「土道を落とす方法」を覚えてくれた折紙のことを

「マスター折紙」と呼び慕っている。

誘宵美九

ー 元アイドル「宵待月乃」がファンや周りの人間に絶望し、精霊になった。だが命懸けで助けてくれた土道を「だーりん」と呼び溺愛している。

鳶一折紙

ー 頭脳明晰な天才で、戦闘能力もA S T 隊員の中でもトップクラス。

炎の精霊「イフリート」に両親を殺されて以来、精霊に復習することを目的にしています。土道とは過去にも会ったことがあるらしく、好意を持っている。物静かな肉食系ヤンデレ。「浮気相手は全員根絶やしにすれば後はいい」と言ってしまうほど。

七罪

「四糸乃と同じくらいの体格で、長い髪がワサつとしている（土道は『手入れが行き届いていない』と考えていた）少女。土道を付け狙ったのは本来の姿を見られた（くしゃみをした時に元に戻った）と勘違いしたため。」

土道や大人の姿に変化できたのは箒型の天使（贗造魔女）の能力であり、土道の周囲の女性を別次元の世界に閉じ込めたのもこの天使の能力だった。

神の右席の救済編 土道ウエイキング

1話 フィアンマの覚醒

——お前の顔を見てると自分のやっていたことの虚しさを感じるよ。

——本当に世界を救う者はそんな顔はしない!!

——あの時、あの場所でアイツは誰にも追いつけなかつた所に立っていたんだ。

——無駄だと思うのだね。

——無駄かどうかは問題じゃなかつたんだ!

——踏みじらせる訳には行かない!!!!

——たかが十字教ごときであの右手を、そして『神浄』説明しようと考えたこと、それ自体が君の失敗だ。

——だ、れだ、、

——オツレルス

——かつて魔神になるはずだった、そして隻眼のオティヌスにその座を奪われた。

——惨めな魔術師だよ

気づけばファイアンマはクレーターを中心にいた

ファイアンマ「ここは何処だ？」

ファイアンマ（俺様は確かアレイスターに完敗して、オツレルスとかいう魔術師がきて）
それからどうしたんだ???

遼子「総員、全力を以て精霊を討ち取れ！」

フィアンマ「!!!」

フィアンマは銃の雨をモロに受けた

黒い砂埃が立ちこめる

遼子「無駄玉を打ちすぎよ。」

隊員A「にしても防御しずにいるなんて、間拔けな精霊だね（笑）バーかバーか！」

隊員B「そんなこと言ってももう聞こえないよ」

ファイアンマ『そうか？』

A S T「!?」

ファイアンマ『俺様はお前が思っているより、物持はいい方だぞ。』

ドガアアアアン!!!!!!

瓦礫が吹き飛びファイアンマがすがたをあらわした！

ファイアンマ「やはり、空中分解そのものは避けられないようだがその形を固定する子には成功した。」

神々しい『右腕』がファイアンマの右肩から生えてきた！

ファイアンマ「有り体にいえば、もはや今の俺様に制限など存在しない。」

遼子「総員、戦闘態勢を整えろ！」

隊員A B『うわあああ!!!?!?』

隊員A Bは銃を乱射した！

フィアンマ「破壊力は要らない。」

弾丸は弾け飛んだ！

フィアンマ「触れれば終わるのだから、相手を壊すための努力は必要ない。」

遼子「一体どうなってるんだ?!?!」

隊員A「なんだアレ、」

隊員B「有り得ない、反則だろ！」

フィアンマ「速度は要らない。」フツ

隊員A B『?!?!』

フィアンマが隊員の前に現れた！

フィアンマ「触れれば当たるのだから、当てるための努力は必要ない。」

隊員は吹き飛ばされた！

遼子「フアツ!?!」

隊員A B『ギヤアアアア!?!』

フィアンマ「足をちぎった訳じゃない。ちよつと捻っただけで大袈裟だな？」

遼子「、、何が？」

フィアンマ「俺様の右腕はお前たちが知っている精霊とやらの力とは根本的にちがう

のだな。」

フィアンマ「俺様が保有しているのは右腕そのものではなく、右腕に備わっているベキ力だ。つまり俺様は十字教的超自然現象を自在に行使できるというわけだ。」

遼子「?、??」

フィアンマ「化学の力に縋るおまえたちにはわからんだろうな。」

フィアンマ「この力は不完全だ。だがこうして使える。この世界が全体があやふやな状態になりつつあるからだ。」

フィアンマ「これで大きな属性4つ全てが少しずつゆがみ始めていることはわかったか?」

遼子「属性?歪み?」

フィアンマ「30年前に起こった空間震を覚えているか?」

遼子「30年前の空間震!?!それが原因でその属性つてのが歪んだってこと?」

フィアンマ「逆だ、元々大きな法則に歪みがあったからこそ、あんなデタラメな力の爆発が起きたんだ。」

フィアンマ「わかったか?ならもういいな?」

遼子「グッ、!」

2話 フィアンマVS精霊

??? 「ハアアアア!!!!!!」

何者かがフィアンマ目掛けて攻撃してきた!

フィアンマ 「!!」ヒュン

ドガアアアアアン!!!!!!

攻撃は失敗に終わった!

フィアンマ 「ほう? お前は何者だ?」

十香 「私の名は夜刀神十香だ!!」

遼子 「プリンセス!」

フィアンマ 「その姿、精霊か?」

十香 「ああ! 何故戦えぬ者を殺そうとする!」

フィアンマ 「ふむ、なら逆に聞こう、何故争いばかり生む人間を生かす?」

十香 「人間は悪いやつばかりじゃない!

シドーが言っていたぞ!」

フィアンマ 「興味深い論だな? だがそれは世界を救ってから考えることにしよう。」

十香「世界を、、、救う？」

フィアンマ「ああ、この世界は歪み切っている。地球は一つの生命体だ、人間はそれを蝕む病原菌でしかないのだよ。だから一度ゼロから始めるのだよ！」

十香「、、、？」

フィアンマ「、、、おいお前、その顔は理解しているのか？」

十香「う、うむ！ちきゆうが病気だということはわかった！」

フィアンマ「、、、まあいいだろう」

士道「十香!!」

フィアンマ「お前はただの人間では無さそうだな？何者だ？」

士道「俺は五河士道！十香の仲間だ！もうこんな破壊は辞めてくれ!!」

フィアンマ「それは出来ぬ相談だな。俺様の計画では半日後に人類は滅びる。」

士十遼『!?!?』

フィアンマ「その序章が今から始まるのだよ！」

光栄に思え！今からお前たちは歴史の最高点に直面するのだからな!!!!」

突然士道たちの立っていたコンクリートにヒビが入り、浮き上がった！

士道「うわあああ!!」

十香「シドー！」ガシッ

琴里「士道！」

士道「琴里!？」

四糸乃「士道、さん！」

耶俱矢「士道！」

夕弦「呼応、士道！」

美九「だーりん！」

七罪「士道！」

折紙「士道！」

士道「皆まで、なんで霊装が、、、!?」

「琴里「あいつがああの右手を出した時、一気に逆流していたのよ。しかも、パワー全開」
ホノオボウツ

士道「嬉しいのか、嬉しくないのか、、、」

空にコンクリートが集まり、十字架の形をして浮かび上がった!

士道「なんだコレ!？」

フィアンマ「歓迎するぞ、人間！」

士道たち『!?!?』

フィアンマ「ようこそ、ベツレヘムの星へ」

美九「なんですかくあの人？偉そ〜ですね〜」

七罪「街を壊して置いて、よくも！」

四糸乃「許せない、です！」

琴里「お仕置きが必要なようね？」

耶俱矢「フン！我ら颯風の巫女にたてついたことを後悔させてやる！」

弓弦「憤怒。木っ端微塵です！」

折紙「士道に害をなすなら容赦はしない。」

フィアンマ「いきがって居られるのも今のうちだな。」

???1「そうですね〜」

???2「精霊程度が一丁前に神の右席と戦おうつての!？」

???3「しかし、戦場に置いての兵士と兵士の交戦は避けられないのである。」

士道たち『!?!?』

フィアンマ「貴様らも来ていたのか。」

テツラ「んまあ、武装した集団に襲われましたけどねえ」

ヴェント「でも、結局人間は人間。」

アツクア「我らの領域には辿り着けまい。」

フィアンマ「お前たちが『右腕』の制御をしてきていたのだな？」

テツラ「大変でしたよ」

ヴェント「まあこんなこと気にすんなっての」

アツクア「、、、」

フィアンマ「そうか、神の右席も揃ったことだし、ならばゲームをしようか。」

十香「ゲーム、だと？」

フィアンマ「そうだ、テツラと橙色の髪の姉妹、ヴェントと獣遣いと魔法使いの娘、アツクアとドレスと炎の娘、そして俺様と残りの2人だな。」

士道「俺はお前と戦うのか？」

フィアンマ「ほう？お前も戦えるのか？」

士道「舐めるなよ、、!!」

フィアンマ「フツ。それではゲームの始まりだ!!!」

3話 神の右席VS精霊十士道

くテツラ 八舞 side

テツラ「ほらほらくかかってきていいんですよ、どうしました？」

夕弦「注意。挑発に乗ってはいけませんよ耶俱矢。」

耶俱矢「わかっているっての！そこまでバカじゃあ、ないッ!!」

耶俱矢が風の槍をつくり飛ばす！

テツラ「優先する。」バシユッ

テツラに直撃したとおもいきや、

八舞『!?!』

テツラ「風を下位に、人体を上位に！」

耶俱矢「効いてない!!」

夕弦「驚愕。直撃していたはずでは、？？」

テツラ「この程度で倒せると思っていたのですか？舐められたものですね？」

八舞『クツ!!』

テツラ「では、次はこちらの番ですね」ニコリ

くヴェント 幼女sideく

ヴェント「キャハハ!!!逃げ回ってないで攻撃しなよ!?!じゃないと、死んじやうよ!?!」
ドーンドーン

七罪「じゃあ攻撃を止めなさいよ!」ヒュン

ヴェント「アア?!?スンマセーン!声小さくて聞こえませんでした!」

七罪「へ贖造魔女【ハニエル】!」

四糸乃「へ氷結傀儡【ザドキエル】!」

ヴェント「楽しくなってきたじゃあない!

さあさあどんどん行くよオ!」

七四『ハアア!!!』

くアツクア 琴里美九sideく

アツクア「戦う前に名を聞いておこうか。」

琴里「五河琴里よ。」

美九「生憎、貴方に名前を教えるなんて絶対嫌ですよ!」ベエー

琴里「ちよつと、美九、」

アツクア「ならば名無しのまま、死ぬがいい
無礼な小娘よ。」ガキン

アツクアが大きくメイスを振りかぶる！

琴里「美九！危ない!!」

美九「【破軍歌姫】！」

アツクア「全力を以て挑むがいい。」

琴里「望むところよ！」

アツクア「せいぜい悔いの残らぬ戦いをするのである！」

くファイアンマ 土道十香折紙sideく

ファイアンマ「ベツレヘムの星は浮上した。

神の右席たちによる力の制御は終わった。

4つの属性は全て正しい位置へと戻った。

お膳立ては終わった。そろそろ精霊の霊力を頂こうか、それでプロジェクトベツレヘムは完成する。」

土道「そうまでして人類を滅ぼしたいのか？」

ファイアンマ「人聞きの悪いことを言うな。」

悪魔で救済の為の犠牲だ。」

折紙「それは貴方の考え方。」

他の人はそれを望んでない。」

フィアンマ「望んでなくとも地球は悲鳴を上げているのだよ。例えば30年前の空間震とか、」

士道「精霊も人間も手を取り合って生きてこうとしてるんだ！勝手に壊させて溜まるか！」

十香「そうだ！人を殺して何のためになる!？」

フィアンマ「基本的に俺様の行動は、、、

俺様のためのものだよ!!!」グアツ

十香「フンツ!!」ガキン

フィアンマ「ほう？よく弾き返したな？」

折紙「余所見をしてる暇はない！」

【絶滅天使】【日輪】！」ビシユン

フィアンマ「フン！」バキン

折紙「!？」

フィアンマは折紙の打った光線を右腕で受止め弾き返した！

折紙「ッ、!!」

ファイアンマ「一度披露したはずだぞ、俺様の右腕は試練や困難のレベルに合わせて出力を最適化する。」

折紙「!?」

十香「？」

ファイアンマ「斬撃だろうが光線だろうが、この俺様の、敵ではない。」

士道「、、マトモじゃねえ、チートだろ！」

ファイアンマ「とはいえ誇るがいい。精霊と戦うのは初めてだからな。この右腕もどのように出力すればいいか迷っているようだ、ぞッ!!」

十香「ハッ!!」ガキン

折紙「フッ!!」キイン

ファイアンマの右腕を全力で薙ぎ払う十香たち！

4話 神の右席（術式発動）VS精霊

「ファイアンマ 土道十香折紙side」

ファイアンマは瞬間移動したように後ろへ飛ぶ！

折紙「逃がさないッ!!」

ファイアンマ「警告。第22章第1節

命名『神^{エリ}よ、何故私^{エリ}を見捨^{レマ}てた^{サバ}のですか^{クダ}』

発動開始。」

ファイアンマの目の前にヒビが入りとてもない勢いの光線が折紙を襲う！

折紙「クッ、!?」

咄嗟に羽で光線を防いだ折紙！

ファイアンマ「やはり単純な術式では分が悪い、か。」ズオツ

『右腕』握られた大剣が折紙に振り下ろされる

十香「嗚ー折紙イイイ!!」ガキイイイイン

ファイアンマの大剣を「塵殺公」で受止める十香

折紙「夜刀神、十香？」

十香「何をブーツとしておる、鳶一折紙！早く奴を倒すぞ！」
そう言い、大剣を弾く！

フィアンマ「警告。第29章 第33節発動開始。」

十折『!!』

士道「グッアアアアアア?？」

十折『シドー（士道）!!!!!!』

後ろの方でフィアンマを観察していた士道の足に赤黒いヒビが入る！

士道「なッ、、グッオオオ!!」ポウッ

十香「あれは!？」

折紙「イフリートの、、」

士道の足に炎がつきヒビを消し去る！

士道「済まない、、俺は大丈夫だ！」

フィアンマ「警告。第35章 第18節

『硫黄の雨は大地を焼く』発動開始。」

空にヒビが入り、無数の矢の雨が士道たちを襲う！

士道「うわああああ!!!」

折紙「士道オオオオ!!!」バツ

士道を庇った折紙に何本かの矢が直撃した！

そして折紙は倒れ、動かなくなつた！

フィアンマ「いかんな。理論値との誤差が酷い。これでは表に引きずり出した倒すべき相手に申し訳ない。」

士道「折紙！しっかりしろよ！！！！~~折紙！！~~」

十香「貴様アアアアアアアアアアアア！！！！」

士道「待て！！十香！！」

フィアンマ「ついに悪意を出したな。」

フィアンマは不敵に笑つた、

くテツラ 八舞sideく

テツラ「優先する！槍の動きを下位に！！

人肌を上位に！！」

八舞姉妹はテツラの能力の前に苦戦していた！

耶俱矢「もうッ！！なんなのよアレ！！」

夕弦「苦戦。全く攻撃が効きません！」

テツラ「そりやそうでしょ〜」

なんせ、優先順位を変更しているのですからね〜」

耶俱矢「優先順位の、、、」

夕弦「復唱。変更、、、？」

テツラ「そうです。ミサでは葡萄酒は

『神の丘』

テツラ「パンは『神の肉』として扱われるんですよ〜」

耶俱矢「それって、『神の子』が死地に送られる前の《最後の晚餐》を由来としてる訳

？」

テツラ「東洋人でも分かれますか〜」

夕弦「混乱。話の意味がわかりません、、、」

耶俱矢「『神の子』は彼の地にて十字架に架けられ処刑されたんだつよね？」

テツラ「そうです。考えてみればおかしな話ですよ〜ただの人間に『神の子』が殺

されるなんて。」

耶俱矢「、、、！」

テツラ「しかし神話は時として優先順位を変更します。——例えば『神の子』が世界人類の原罪を背負うために本来の順位を無視して《ただの人間》にあつさり殺され

るーというようにね。」

耶俱矢「それで『神の子』の神話を完成させるための技、、、優先順位の変更って訳ね。」

夕弦「恐怖。何故耶俱矢がそんな詳しく知っているのですか？」

耶俱矢「伊達に中二病やってないわよ！」

弓弦「暴露。中二病と認めましたね？」

耶俱矢「あッ!!、、つて今はそんなのどうでもいいわよ！」

テツラ「それこそが私の扱う唯一の術式

『光の処刑』です。」

八舞『!!』

テツラ「小麦粉を媒体とした刃の形成はその副産物にすぎないのですよ。」

耶俱矢「夕弦、意味わかった？」

弓弦「不可。弓弦には理解出来ませんでした」

耶俱矢「つまり、あの技の前では強さも弱さも全部関係なくなるの。アイツが順番そのものを制御してるからね。」

夕弦「理解。つまり今のところ打つ手なしの上に相手はチート、と言うことですね。」

テツラ「さて、ネタバレはしましたけど、

その先はありますか？」

八舞『、、クツ!!』

テツラ「10秒与えます。その間に反撃するなり逃げるなり策をねってください。出るものなら、ねえ？」

??? 「大サービスでいやがりますね。」

テツラ「？」

八舞『真那!!』

真那「10秒あれば3つほど大きくは思いつきやがりますよ!!!」ダンッダンッダンッ

テツラ「優先する！弾丸を下位に！人肌を上位に！」

真那「フツ！」ジャキン

テツラ「優先する！光剣を下位に人肌を上位に！」

テツラ「、まさか、こんなオモチャが私を倒す策な訳がありませんよね？」

真那「残念でやがりすね。今の2手で確信しました。貴方の弱点を。次で終わりで
す、左方のテツラさん。」

テツラ「、、言いますねえ」

ドガアアアアン

複数の物陰が現れ爆発が起こる！

テツラ「!？」

八舞『!？』

真那「、、あれは！バンダースナッチ!？」

テツラ「なるほど、そう来ましたか。殲滅術式のための儀式場のベツレヘムの星を攻撃しますか？」

顎に手を乗せ忌々しげに笑うテツラ！

5話 押し始める精霊達と集う猛者

「ヴェント 幼女side」

ヴェント「、、あんだ達は全然悪意を見せないのね。」

よしのん『四糸乃は自分がやられて嫌なことは他人にはやらないんだよー』

四糸乃「、、！」コクコク

七罪「私も悪意はあるけど、イタズラ心だけだからね。」

ヴェント「厄介ね、、ッ!」ズルッ

ヴェント（これは!?!学園都市の「界の圧迫」!?!

いや違う!力が分解されていく!?!)

七罪「やつと始まったわね。力の分解。」

ヴェント「何をした!?!」

七罪「悪意を引き出すには、それと同等の悪意が必要なはず。」

四糸乃「だから、術式を、逆算して力を、分解するんです!」

七罪「フラクシナスにそういう装置があつて一様調べてみたの。まさかこんな所で役に立つとはね。」

ヴェント「これ、だから、化学は、、ッ!!」ヨロツ
 四糸乃「これは、化学の問題じゃ、ありません!」

七罪「ここで終わりよ、オバサン。」

ヴェント「、、ッテ、、カヨ、、」フラフラ

七罪「何?」

ヴェント「終わってたまるかよオオオオ
 !!!!!!」

七四『!?』

四糸乃と七罪を強風が襲った!

七罪「大丈夫? 四糸乃、よしのん?」

四糸乃「なん、とか。」

よしのん『ギリギリセーフだよー!』

ヴェント「これだけ力が残ってればなんとかなる、いや、して見せてやる!」チ
 ダ
 バダバ

七罪「まだあんなに力があるなんて、、」

よしのん『強敵だねー』

くアツクア 琴里美九sideく

アツクア「これは確か、DEM社のバンダースナッチであるか。」

琴里「ウエストコットのやつとの差し金なの、？」

美九「【破軍歌姫】【行進曲】！」

琴里「【灼爛殲鬼】【砲】！」

アツクア「おもしろい！ならばこちらも奥の手を使うのである！」ダンツ

アツクアは地面を蹴り空を飛んだ！

アツクア「T H M I M S S P」

(聖母の慈悲は嚴罰を和らげる)

琴里(何を唱えてるのかしら?)

アツクア「T C T C D B P T T.∴」

(慈悲に包まれ)∴

「R O G B W I M M A A T H！」

(天へと昇れ！)

アツクアがいつきに降下する！

琴里「焼き尽くせ！【灼爛殲鬼】！」

【砲】と【聖母の慈悲】がぶつかる！

アツクア「オオオオオオツツツ

!!!」

琴里 「はアアアアアア
!!!!」

??? 「なかなか、面白い展開ですね。」

美九 「!? なんで貴女がここに？」

??? 「あのバンダースナッチを見ればわかるでしょう。」

美九 「協力してくれるんですか？」

『世界最強の魔術師』さん?」

エレン「そうですね。でもこんな魔術師がいるようでは、私もまだまだです。」
エレンはC R ユニットへペンドラゴンを起動させる!

6話 完成する神上 覚醒する士道

「ファイアンマ 士道十香折紙side」

十香「貴様、よくも我が友を、ッ!!」ギリギリ

ファイアンマ「ハッハッハッ、どうだ!?仲間を殺られた気分は?

俺様が憎いか?助けることの出来なかったことが悔しいか?」

十香「貴様アアア!!」ブンッ

十香が【塵殺公】を振る!

それを難なく跳ね返すファイアンマ!

士道「うオオオオオ!!!ファイアンマアア!!!」っサンダルフォン

十香「シドー!!」

ファイアンマ(これ待っていた!!霊力を封印する五河士道の^{セフィラ}霊結晶を抜き取り『右腕』

に取り込めば世界を救済することができ『神上』となれる!)

フラクシナス艦内

神無月「士道さんの霊力値が急上昇してる!？」

令音「、、精神が不安定になってシンのなかにあつた霊力が全て反転しようとしている

靈結晶が反転する。

く士道 心の中sideく

暗い。何も無い。十香も折紙もファイアンマも見えない。

士道「此処は、、何処だ？」

士道は暗闇の中にいた。

??? 「気がついたか。人間。」

士道「お前は!? 十香、なのか?」

そこには黒い霊装を纏う『十香』がいた。

十香? 「あの時はよくも私を侮辱したな? と言いたいたいところだが今は、此処ヤミに来たことを歓迎しよう。」

士道「やみ、?」

十香? 「そうだな、お前たちで言う『反転』と言うやつだな。」

士道「俺が、反転した、のか?」

十香? 「そうとしか考えれん。受け入れる。」

士道「そんな、俺はどうなるんだ?」

十香? 「あの時はお前が表の『私』をもどしたのだろう? その当人がここにいるなら私にはわからん。」

士道「嘘だろ?、十香! 折紙! 琴里! 四糸乃! 耶俱矢! 弓弦! 美九! 七罪!」

士道「、、、俺は、どう、すれば、、、ッ!!

みんな、、、助けてくれえええー———————」

!!!!!!!!!!!!!!

くファイアンマ 士道十香折紙sideく

『美しい』という言葉だけで言い表せなかった。

士道はいままで封印してきた精霊たちの霊装を混ぜ合わせたような、真つ黒な姿をしていた。

宙に浮く《デビル》の羽、背中から生えてる《ベルセルク》の翼、長く伸びた髪には《ディーヴァ》の三日月型の髪飾り、手首には黒く燃える《イフリート》の炎、靴は氷でできた《ハーミット》のハイヒール、纏う服装は《ウィッチ》のもの、右手には《プリンス》の【暴虐公】^{ナヘマ}が握られていた。

見た目は士道ではなく、『土織』になっていた。

十香「シ、ドー、、、なのか？」

フィアンマ「予想以上だ！ここまで力を蓄えていたとは！あとは霊結晶事貰えば全ての救済は完了する！」

士織「なんだ貴様らは？まあいい、名などきかなくてもいいか。すぐに滅ぼしてやる。」

十香「!？」

士織「この場所も、あの赤いヤツも、そして貴様もだ、『表の十番』」

フィアンマ「私語はそこまでしてもらおうか？こちらも急いでいるのでね。」

士織「いいだろう。まず貴様から殺してやる。」

フィアンマ「フツ、、出来るものならな。」

そう言いフィアンマは『右腕』を振った！

士織「ガツ!?アアアアア!!」ブチツブチツ

いきなり士織の胸から八色の輝きを放つクリスタルが引つ張り出されるように出てきた。

当然士織の胸には穴が開き、目を虚ろにしながら吐血した。

十香「シドオオオオ!!!」

グシャリと音を立てて士織は地面に倒れ込んだ。

十香が駆け寄るがその者の瞳には光がなく十香を映さなかった。

十香（これは、前にも同じことがあったぞ！）

十香と士道が初めてデートした日、その時にASTだった折紙が打った弾丸が十香を助けるために士道の腹に直撃した時と同じ光景だった。

フィアンマ「掴んだ、、ハッ、ハッハッハ!!このドス黒く光るのは精霊の『負の感情』。これを俺様の力に変えて地上に放出すれば、間違いなく人類は消し飛ぶ！空の霊結晶を『右腕』に加えれば収束する力も増えて、文明を創りあげる力が振るえる！」

十香「し、、ぞー、、」

フィアンマ「邪魔だ」

十香「、、あつ、シドー、、」

フィアンマは十香を道端の小石のようにはらった。

フィアンマ「貴様には感謝せねばな？喜べ、肉塊！

貴様の人生の意味は無事狩り取れたぞ!!」バシユン

バキン

ファイアンマ「!!???」

ファイアンマの放つ光線が倒れているしおりの前で消し飛んだ!

ファイアンマ「貴様の霊結晶は奪ったはずだ、なのに何故力が使える!?!」

土織? 「、、クツ!!ゴホツゴホツ!」

十香 「、、んあ? ハツ!シドー!!無事か!?!」

士織? 「ゴホッ!、あぁなんとかな?」

フィアンマ「何が起こった?」

さっきの士織とはうって変わり、瞳は生気に満ちて輝いていた。

宙に浮く《エンジェル》の羽、背中から生えてる《ベルセルク》の翼、

長く伸びた髪には《デীবューア》の三日月型の髪飾り、手首には赤く燃える《イフリー

ト》の炎、靴は氷でてきた《ハーミット》のハイヒール、

纏う服装は《ウィッチ》のもの、右手には《プリンセス》の「塵殺公」が握られていた。

姿は士織だが、その気迫は、『士道』そのものだった。

士道「これが、俺たちの力だッ!!」
キズナ

6. 5話 反転を感じ取る精霊たち 倒れる右席たち

「テツラ 八舞真那 side」

真那「まあ、バンダースナッチはほつときやがりましたよ。」

夕弦「賛成。まずはコイツです。」

耶俱矢「ふん！八舞の真の力を見せてやる！」

夕弦（質問。ところで真那は弱点がわかったのですか？）

真那（はい。おそらくアイツは一度に複数の攻撃を優先で防ぐことができませぬ。）

耶俱矢（つまり、私たちが天使で、真那が銃で何とかするってことね!?)

真那（理解が早くて助かります。合図したら一齐に叩きますよ。）

夕弦（了解。ですがフルパワーで技を撃つには数秒掛かります。）

テツラ「もうイイですか？」

耶俱矢「フッ、待たせたな！」

テツラ「その様子ですと、なにか作戦があるのですね？」

夕弦「指摘。耶俱矢のせいでバレました。」

テツラ「やれやれ、私としてはそちらの方は少々苦手ですし。」

まあ10分もあれば足りませんか。遠慮なさらず、存分に玉砕してください。」

真那「生憎、玉砕する気は無いのでツ!!」ダンッダンッ

テッラ「優先するー弾丸を下位に人肌を上位に!」

真那「セアツ!!」ジャキン

真那の引き抜いた光剣が近くの柱をこする!

飛び退いてテッラと距離をとる真那!

テッラ「どこ狙ってるんですか?」

真那「今です!」ダンッダンッダンッ

八舞『颯風騎士』『天を駆ける者』!!!』ゴオツ

テッラ「!? 優先すrooooooooo」ボガアアアアン

耶俱矢「やった!」

真那「ふうーやりやりましたか?」

夕弦「勝利。ざまあみろでsー」ズブッ

耶俱矢「ゆ、づる?」

テッラ「今当たったのはペンデュラムのほうですかね?」

夕弦「驚、愕。まだ、存命です、か。」

テッラ「さてさて、やってくれましたか?」

真那「ぶッ」

テツラ「？」

真那「あはは！」

テツラ「何かおかしんですか？壊す前に壊れてしまえば面白くないですよ」

真那「いや〜一樣、保険つけてかけとくべきですね。」

テツラ「は？」

ビシビシビシッ!!

真那の光剣がかすった柱にヒビがはいりテツラの方へと倒れた！

テツラ「なにい!? 優先sー」

真那「遅い!!!」ダンッダンッダンッ

テツラ「ゴハッア!!!!

異教の小娘どもがアアアアアアアアアアアア

八舞『荒れ狂う風の中ではじけ飛べ！

!!!!!!!!!!!!!!

【颯風騎士】「天を駆ける者」!!!」

テツラ「ぎやああああ!!!」ボシユツ

暴風に巻き込まれテツラは消し飛んだ!

耶俱矢「今度こそ、終わった?」

真那「はい。完全に消滅しやがりました。」

耶俱矢「弓弦! 弓弦怪我大丈夫!」

夕弦「グデー

耶俱矢「夕弦! 真那、夕弦が!」

真那「大丈夫でいやがるんでしょう。当たってたの脇腹だし。」

耶俱矢「え! あッ!! ほんとだ。」

夕弦「失敗。もう少しで耶俱矢のぐちやぐちやの泣き顔が見れると思ったのに。」

耶俱矢「~~~~~ツ!!!」心配して損した!!!」

夕弦「微笑。やはり耶俱矢は単純で可愛いです。」

真那「イチヤつくのは後でやってください。兄様を迎えに行きやがりますよ!」

ゾクッ

耶俱矢「この気配、、、」

夕弦「確信。十香が反転した時と一緒にです。でもこれは、、、」

真那「まさか、この感じは、、、」

八舞真那『士道（兄様）!!!!』

くアツクア 琴里美九エレンsideく

エレン（今はアツクアとイフリートが正面衝突中、顕現装置で動きを封じたあと、、、）

エレン「精霊に助力をしてもらうのは癪ですが、、、ディーヴァ。」

私を強化して下さい。」

美九「むう、、、分かりました。」

【破軍歌姫】【行進曲】！

エレン「行きます!!!!イフリート!そのまま、アツクアの足止めをしてください!」

琴里「メイザース!?! 分かったわ!」

アックア「くツ!!　ここで世界最強の魔術師であるか、、、ツ」
エレン「貴方の中にある莫大な力を【拡散顕現装置】を使えば、その保有する大きな力の影響で大爆発を引き起こせるはずですよ!!」

アックア（これって天草式の『聖人崩し』そっくりである）

アックア「グアアアア!!!」

エレン「イフリート!　もう大丈夫です!」

琴里「あれ?　待って、【砲】が止まらない!　どーしよう!」　ゴオオオツ

エレン「危なツ!?」　っリアライザ

アックア「え?　ちよつ、まつてー」　ボシユツ

琴里「、、、」

美九「、、、」

エレン「消し飛びましたね。」

琴里「、、、ええ」

美九「、、、ですなー」

エレン「敵は倒しましたし、一件落着です。」

琴里「そ、そうよね!　一件落着よ!」

美九「後方のアックアさん、申し遅れました、誘宵美九です。」

つてもう聞こえないか。ご愁傷さまです。」

美九は誰にも聞こえない声でアックア（空）に向かって合唱した。

アックアキラーン

琴美『そんなことより士道（だーりん）は!?!』

アックアガーン

くヴェント 幼女sideく

ヴェント「私は化学が憎い！化学が嫌い！化学のせいで弟は死んだ！」

七罪「え?、?、?、どういう事?」

くヴェントの過去説明中く

七罪「それで化学に復讐しようっての!?!そんなこと弟さんが望むわけないじゃない
!!」

ヴェント「黙れ!!しまったような口をきくな!!!」

四糸乃「少なくとも、とも、貴女に、生きて欲しかったんじゃない、ない、ですか?だから、自
分を、犠牲に、出来た、!」

ヴェント「ツ!!、?、?、確かにあんたらの言うとうりかもしれない。」

七罪「なら!」

ヴェント「なら、尚更私みたいなやつを作らないために!化学を倒す!!!」

七罪「このッ！ヤロー！！！！
 【贗造魔女】！！！！
 ヲェント「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
 七罪「やああアアアア
 !!!!!!」

よしのん『いつつ、、、しよーたーいむ！！！！』
 ヲェント「おヴェウアア！？」

よしのんが叫んだ途端、ヴェントのしたから【氷結傀儡】の氷がでてきた！
 よしのん『四糸乃！ここで台詞！』

四糸乃「、、、うん！

頭冷やして、出直して、、、こいつ！」ウデクミ

七罪「、、、え？ 四糸乃？」

四糸乃「、、、はい？」

七罪「あ！ いやッ！！なんでもないです。」

四糸乃「、、、士道さんの、とこに、行きましよう！」

七罪「え？ ああ！ そうね！」

七罪（四糸乃マジでカツコよかったな／＼／＼）
覚醒する士道のもとに精霊が集う！

7話 暴かれる過程と崩れゆく結果

「ファイアンマ 士道十香折紙 side」

士道「ようやく、すこしはわかってきたぞ。」

ファイアンマ「なに、をだ？」

士道「ベツレヘムの星は、なぜこれほど巨大にしなければならなかったか？ 本当に右方のファイアンマが最強の存在なら、世界中の教会やら聖堂やらのパーツを集めてくる必要はなかったんじゃないのか？」

ファイアンマが額から冷や汗を流す。

士道「お前の力は敵の難易度によって変化する。それは、敵が強ければ強いほど、その力は強引に引き出される。でも、そこまで無理やり力を引き出さなければならぬ理由は何なんだ？ お前が本当に最強なら神の右席とのゲームなんて本当に必要だったのか？」

「 1 拍置いて士道は口を開いた

士道「つまり、お前はおびえていたんじゃないのか？ 本当に自分のからだのなかに世界を救える力があるかどうか、わからないから！」

ファイアンマ「、、クツ!!」

ファイアンマは顔を歪め、『右腕』から光線を発射した！

士道は右手に握られた【塵殺公】で攻撃を弾き飛ばした！

士道「世界が終ったことなんてない。少なくともこの現代に世界崩壊が起きたなんて聞いたことは無い。」

士道は話しを続ける。

士道「だったら世界を救えるを発揮する機会に恵まれることなんてない。俺の使える天使は、強く思つて顕現しなければ力が見えないのと同じように。、、そうさ、一度も世界を救った事のない者に世界を救える力があるかどうかなんて分かるはずがないんだ！」

ファイアンマ「グツ!!」

士道「だから、お前はここまでしなくちや行けなかつたんだ！」

十香（どういう事だ？なんの話しをしているのだ？）

フィアンマ「だから、どうしたというのだ!? お前には俺様を糾弾する資格などあるのか!? 世界を救えるほどの力を実感したことがあるとでもいうのか!?」

士道「あるさ。小さくても、俺の周りにあつた世界は救つてきたつもりだよ。その瞬間を目撃したことがあるぞ!」

十香「そうだ! 士道は何度も私や私の友を救つてきたぞ!」

折紙「私なんか、過去にまで来て助けて貰えた。」

十香「え? 生きていたのか鳶一折紙。」

折紙「まるで死んでいた方がいいみたいな言い方。それに私は貴女の友達になつたつもりは無い。」

十香「なっ!? 聞いていたのか! 鳶一折紙!」

士道（なんかカツコイムード台無しだな、）

士道「世界を救つてやると思っているやつにこの世界は守れない。」

お前に救ってもらうほど俺たちの世界は弱くない!」
『そう(だ)(です)(よ)(だよー)(でやがります)』
!!!!

士道「みんな!」

美九「え? 士織さん?」

七罪「こんな時まで女装してるの!」

士道「いや、気づいたら本当に女になってたんだよ。」

琴里「そんな、おにーちゃんがおねえーちゃんになっちゃった！」

耶俱矢「まさか、士道が性転換するなんて、」

夕弦「提案。今日を士織の誕生日にしましょう。」

四糸乃「ハッピー、バースデーです。」

よしのん『にしてもそれ、霊装？』

真那「姉様、まさか精霊に、、!?」

士道「もう呼び方が変わってる!? それよりも、みんな早く逃げてくれ!この星の降下がもう始まっているんだ!」

琴里「士道はどうするの!？」

士道「俺はコイツとケリをつける!」

十香「シドー、私も残るぞ!」

士道「十香、」

十香は士道を真剣な目で見つめていた。

士道「わかった。俺と十香がコイツの相手をする!みんなは急いで避難してくれ!」

四糸乃「気をつけて、ください、士道さん。」

よしのん『がんばってね、士道くん!』

琴里「そいつを倒して、さっさと帰ってきなさいよ！」

耶俱矢「土道！やられた分はやり返しなさいよ！」

夕弦「応援。がんばってください、土道！」

美九「だーりん、そんなヤツけちよんけちよんにしてやってくださいよ！」

七罪「土道、あの、がんばってね。」

折紙「土道、無茶は禁物」

土道「ああ！行ってくる！」

十香「なあ、私には何かないのか？」

8話 救われないお前を救ってやる！

空に輝くベツレヘムの星。

その上で闘うの神の上を行くものと覚醒した精霊と最強の精霊がいた。

士道「うおお!!」

十香「はアア!!」

士道（士織の姿）と十香はそれぞれが持つ【塵殺公】を振るった。

フィアンマ「、、クツ!!」

フィアンマは『第三の腕』を使って攻撃を防ぎ、跳ね返した。

すかさずフィアンマは士道立ちに向かって【遠隔制御霊装】（どこに繋がってるのか分からないもの）を使った！

フィアンマ「はッ!!」

【遠隔制御霊装】から出る光線は十香に向かっていった。

士道「【氷結傀儡】!!」

ガキン

十香の目の前に氷結傀儡サドキエルが現れ、光線を防いだ。

フィアンマ「何故だ、何故思いどろりに行かない!」

崩れかけている『第三の腕』を見てフィアンマ嘆いた。

フィアンマ「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

フィアンマは右腕を伸ばし、二人を襲った!

十香「グツ!!」

士道「うおツ!」

!!!!!!!

【塵殺公】を盾にして攻撃を防いだものの、ベツレヘムの星が大きく揺れた。

真那『姉様! DEM社ラタトスクがベツレヘムの星の【分散顕現装置】を使いやがりました。私は先に執行部長と一緒に脱出装置を使って逃げさせて頂きました。数もそこまで残っていません。姉様も急ぎやがってください!』

真那の声がスピーカーを通して聞こえてきた。

士道「姉様って、いやいや今はこっちだ。」

十香「終わりだフィアンマ!」

士道「お前の右腕も儀式場であるベツレヘムの星も力を失いつつある!! 何より本当に世界を救いたかつのなら、世界を救う力の持ったお前を否定したことを受け入れなければならぬ! それをできない時点でお前の『救い』は破綻している!!」

フィアンマ「確かにこの状況では劣勢だ。このままでは俺様の計画は 続行すること

は出来ない。このままではな？」

士十『!?』

ファイアンマが不敵に口の端を吊り上げると、空がさらに黄金に、眩く光始めた。

それはまるで、力を抑えていないかの様に。

ファイアンマ「これはお前たちが招いた結果だ。」

十香「なんだと？」

ファイアンマ「本来は段階を得て地上を娩出するはずだった。だが、お前たちが否定したことによって天空と地上に不自然な歪みが生じて蓄積された霊力、もといテレズマは天空から地上へ一気に降下する羽目になった。正直俺様の予想していたルートとは違ったが、地上が光で満たされるなら結果は変わらない。」

士道「お前、何が起こるかわかってるのか!? そんな莫大な力が制御もされずに荒れ狂ったら、人間の文明なんてまとめて破壊されかねないんだぞ!!」

十香「(?!?) ナンダトツ !? きなこパンもか!？」

ファイアンマ「そうだ、残念だともお前らにとつてはな? いかにお前らが『救い』を否定しようが強大な力はそれを上から塗りつぶす。あまりにも強大な天罰は人々の結束など簡単に突き崩す。バベルの塔の崩壊によって人の繋がりが分断されたのと同じように、そこで生み出される悪意に反応して再び俺様は莫大な力を引き出せるようになる

!

フィアンマは腕を大きく広げ勝ち誇ったように叫んだ。

士道「フィアンマ、ッ!!」

十香「クソッ!!」

フィアンマ「お前たちの方法で世界を救うには遅すぎた。これで俺様の勝ちだ!!」

side

「全く士道さんは世話のやける方ですわね。ココはこの時崎狂三が力をお貸し

ますわ!【刻々帝】!!!

影から出てきた狂三はベツレヘムの星を見上げ、背中に金色の時計を作り出した。

狂三の持つ古式歩兵銃が赤く光り現代風のスナイパーライフルに変化した。

狂三「^{ザフキエル}【刻々帝】^{ブレイレータ}【収束の弾】」

ダアンツ!!

銃口から発射される赤白い弾丸はベツレヘムの星の上にある光に向かっていった。

狂三「私の計画を邪魔されるわけにはいかないので、それではごきげんよう士道さん。」

空に向かって一礼した後狂三は影に潜って行った。

く精霊sideく

折紙「見て、また別の光が！」

琴里「一体何がおこっているの？」

く真那 エレンsideく

エレン「これは、、」

真那「【ナイトメア】、、ッ!!」

くフラクシナスsideく

神無月「巨大な霊力を確認! 【ナイトメア】のものです!」

令音「シン、頑張ってくれ、、」

く???
???sideく

???「五河?、、まさか、そこに居るのか、、」

くファイアンマ 土道十香sideく

ファイアンマ「なん、だ、必要な出力は満たしていたはずだ。地上には戦略上の条件を満たすだけの破壊が起こり、俺様の勝利を後押しするはずだった、、ッ!!」

土道「もう、いいか？」

ファイアンマ「ッ!?!」

士道はフィアンマを睨みつけ呟いた。

士道「もう、この辺りが、お前の『幻想』の引き際だ!」ブンツ

士道は「塵殺公」を振りかぶり、斬撃を飛ばす。

フィアンマ「クツ!! な、に、に!?!」

辛うじて斬撃を防いだフィアンマは斬撃の余波でよろけた。

フィアンマ「地上を覆っていた悪意が減少している!?! 何故だ!」

十香「む?」

フィアンマ「グツ!!」

遠隔制御霊装『警告、第88章 第1節 検索作業中の本体に以上有り。只今通信状

況が不安定になっており作業効率に深刻な弊害が発生しております。』

フィアンマ「なにい!?! D E M社の通信妨害か!?!」

士道（電波で繋がってるのかソレ?）

ゴゴゴゴゴゴオ!!!

士道「う、おお!?!」

十香「な、なんだ?」

フィアンマ「不幸! ハッハッ、5秒、10秒稼げればそれでいい、その間に妨害電

波発生源を強引に逆算し迎撃すればいい。例え高負荷で周りの建物諸共吹き飛ばして

構わん！ココで、目の前の敵を洗い流す!!!」

士道「グッ、、うおおおおお!!!」

十香「行けッ、シドー!!!」

叫ぶファイアンマに向かって士道は飛び上がり「塵殺公」を構えた！

ファイアンマ「クッ!! 俺様が神の子の恩恵や奇跡を最大限に利用し現象を起こそうと言うのに！ この野郎お構い無しだ！」

この時既にファイアンマは士道の攻撃範囲内に入っていた。

ファイアンマ（幸運も不幸も関係ない！コイツはそういつた曖昧なものを全部、自分の足で踏破する力を持っている！）

士道「お前がそんな方法で誰一人救えないって言うなら！

そんな救われないお前を救ってやる!!!」

士道は【塵殺公】を投げ捨て自分の拳でファイアンマを殴りつけた!

最終話 ベツレヘムの星と士道

ファイアンマ「ガハアツ!!」

ファイアンマは士道に顔面パンチをモロに食らっていた。

殴られたファイアンマ地面に体を2、3回打ち付け『第三の腕』は消滅した。

【遠隔制御霊装】も転がって下に落ちた。

十香「シドー! 早くしろ! この星が落ち始めてるぞ!」

世界を覆っていた黄金の光が消えて暗い夜になっていた。

ファイアンマ「ここまでか、、」

士道「おい! 行くぞ!」

そう言い士道はファイアンマの胸ぐらを掴んで肩を貸した。

十香「シドー! 何故そいつを連れていく!?!」

士道「言っただろ? 救ってやるって。」

十香「そうか、、シドー言うなら許す。」

崩れるベツレヘムの星を3人は小走りに進んでいた。

ファイアンマ「恐らく、脱出用のコンテナはもう使い物にならない。個人用のものが一

機か二機動かせるくらいだろう。この3人の誰かが助からん。」

土道「らしいな。」

十香「おい！ どういうことだ!？」

十香は憤慨するも土道は落ち着いていた。

そしてコンテナには

十香とファイアンマが乗った。

ファイアンマ「いいのか？ 俺様は世界中がどれだけ広いかもわからん人間だぞ？」

士道「そうか、、ならこれからたくさん確かめてみるよ？」

士道はそう言い残しコンテナを閉めて発射させた。

十香「シドー！ どういうつもりでヤツを行かした!? それに私はまだ飛べる！ それで2人で帰ればいい！」

士道「俺はもう飛べないし、この星をどうにかしなければならぬ。これが地上に落ちたら天宮市だけじゃなく周りの街にも被害が出る。だからさ十香、、分かってくれ。」
チユツ

十香「!?」

このタイミングで士道は十香の霊力を封印した。

つまり、十香はもう霊力を使えない。

十香「シ、ドー、？」

士道「じゃあな十香、、必ず帰るから。」

士道は十香のコンテナを閉めて発射させた。

???『感動的だね?』

士道「!? その声はウエストコットなのか?」

ウエストコット『覚えててくれたんだね。嬉しよ。』

士道「御託は要らない。お前は何をしようとしているんだ?」

ウエストコット『君と同じさ。ベツレヘムの星を止めたい、だから君に話しかけているのさ。』

士道「なんとかならないのか？」

ウエストコット『君が望めばその力は振るえるはず、だからこの星を支える中心核を君にどうにかして欲しい。位置はこちらが把握しているから伝えるよ。』

士道「、、やけに協力的だな？」

士道は以前のことのでアイザックを信用出来なかった。

ウエストコット『そう邪険にしないでくれ。僕も自分の会社にあんなものを落とされてはひとたまりもないからね。』

士道「わかった。言うとうりにしよう。」

ウエストコット『助かるよ、まずはそこから北へ向かって13番目の柱を斬つてくれ。』

その後士道はウエストコットの支持に従い次々と支柱を倒していった。

ウエストコット『それでラストだよ。』

士道「はアツ!!」バキン

ウエストコット『よくやってくれたよ士道くん。ではこれで。』

士道「待て！ ウエストコット！」

神無月『士道くん！緊急でお知らせしたいことが！』

士道「神無月さん!？」

神無月『今、フィアンマの作り出した天使が日本海にて進行中！新たな肉体を補充するためだと思いますが、』

士道「どういうことですか？」

神無月『あの天使が司るのは水です。特別な記号や象徴を含む極冠の水を使えばその力はさらに強大になります。しかし無理に力を引き出そうとすれば、天空を構成している肉体その物が爆発し、大量のテレズマが放出される恐れがあります。』

士道「、、ツ!!」

士道は何かを掴んだかのようにはしりだした。

くフラクシナス side く

令音（どうやって止める？ 精霊たちの力を使っても止められるかどうか、）

クルー「村雨解析官！ ベツレヘムの星が予定軌道から逸れて行ってます！」

令音「なに？」

神無月「士道くん、まさか!？」

く士道 side く

日本海の上には氷の翼を大きく広げる天使の姿があった。

その時天使は何か気づいたのか、後ろを振り返る。

そこには急接近するベツレヘムの星があった。

天使はそのベツレヘムの星にぶつかり日本海に突っ込んだ。

五河士道は「塵殺公」を構え天使に近づいていった。

士道（確かにこの世界はいつか滅んでしまいかもしれない。でも、こんな悲劇的な結末じゃなくていいはずだ！そいつを食い止める為に戦ったていいはずだ！）

そして天使に向かって「塵殺公」で切り上げた。

日本海には天にも登るような勢いで氷の翼が飛び出した。

数秒後翼は砕け辺りを美しく輝かせた。

くファイアンマ side く

ガアンガアンガアン!!

ファイアンマは個人用のコンテナの扉をこじ開け外に出た。

周りは一面雪だった。

ファイアンマ「、、フツ。」

ザクツ

ファイアンマ「ガツ!、、グウ!？」

突如ファイアンマの右腕が切り裂かれた。

ファイアンマ「な、、貴様は、、?」

??? 『あの子の価値もわからないとはいえ君はあの子を手にかけた。さすがに放置はできないよ。』

ファイアンマ「ヤツの、、価値?」

??? 『そうだよ。あの子たちは私の子だから。』

ファイアンマ「なるほど、、お前が『始源の精霊』か。随分と見えづらいのだな。」

フアントム『まだこの姿を見られる訳には行かないからね。』

ファイアンマ「お前を見てると自分のやつてきたことの虚しさを感じるよ。本当に世界を救う者はそんな顔はしない。あの時、あの場所でアイツは誰にも追い着けなかった所に立っていたんだ。」

フアントム『無駄だと思うよ。あの子に負けた君が立ち向かうなんて。』

ファイアンマ「無駄かどうかは問題じゃなかったんだ、、

踏みにはらせる訳には行かない！」

フアントム『アイシン・ソフ輪廻楽園』』

ズドオ

ファイアンマはフアントムの力を前に為す術なく倒れた。

フアントム『君があの子たちを利用するには足りなさ過ぎる。

それに『十字教』程度では精霊は越えられないよ。』

くフラクシナス 精霊sideく

琴里「おにーちゃんはまだ見つからないの!？」

神無月「今、総動員で探しています！」

十香「私の、せいだ。無理にでも連れてくるべきだった。」

耶俱矢「大丈夫だよ。士道は、、生きてるよ。」

夕弦「心配。士道無事でいてください。」

神無月「!!」

琴里「どうしたの神無月!?! 見つけた!?!」

神無月「いえ、これは、、フアントムです!!!北海道にフアントムらしき霊力反応が!!」

みんな『!?』

フラクシナスに乗っていた全員が驚愕した。

神無月「!!」

琴里「今度は何!?!」

神無月「土道くんの、キーホルダーを、日本海沖で発見したそうです、行方は不明、近くにはいなかったようで、」

「またも全員が絶句した。まるで死んだことを知らせる発見だった。」

令音「霊力は戻っていない、だとすればシンは生きているはずだ。」

琴里「、、そう、よね。」

全員が反転しそうな勢いだった。

やはり五河土道の存在は彼女たちの中では大きくなりすぎていた。

第1章「完」

暗部戦争編 土織ウイザード

プロローグ 動き出す暗部組織

（日本海）

日本海の中央付近で1人の少女とそれを見下ろす影が2つあった。

「では頼むよ。」

2 「本当によろしいのですか？これは危険では？」

「問題ないさ。『彼』は記憶を喪っている。」

2 「!? それはほんとうですか？」

「ああ、だから我々の力になってもらうよ。あの力を使えるのなら【顕現装置】な

んて軽いものだろう。」

??? 2 「なるほど、、アイクがそう言うなら。」

ウエストコット 「土道くん、君には今から『魔術師』ウイザードになってもらうよ。これから始

まる暗部戦争のためだね。ハハハッ

フツハハハハハハ!!!

海から引きずり出された五河土道はエレンとアイザックに連れていかれた。

（??? side）

??? 「次の仕事は、精霊の保護？」

海原 「おかしな話ですね？ それはラタトスクの仕事では？」

結標 「指令が出たからにはやるしかないわよ。」

一方 「チツ、めんどくせエ、さつきと終わらせるぞ『殿町』イ」

殿町 「今回ばかりはお前でも手こずるかもな？ 相手は魔術師だぜ？」

一方 「何が相手かはどオでもイイ。叩き潰すだけだア。」

海原 「もう少し慎重にやってはどうかね？」

一方 「てめエがビビりすぎなんだよオ。イヤなら退職しろよ。」

結標 「言い争っててもしょうがないわ。依頼が無くなる訳でもないし。」

殿町 「んじやまあ、出発と行きますか！」

（??? side）

??? 「ほう、グループが動いたか？」

2 「そうみたいね、貴方のターゲットもキチンと動いてるわよ。」

??? 「そうか、いい情報だ『心理定規』。なら、まずは『ピンセット』を取りに行くぞ。」

心理 「ハイハイ、熱くなりすぎて暴走しないでよね。」

??? 「楽しみだな？この垣根帝督さまの未元物質をみせてやるよ！」

???
side

??? 「ふむ、スクールもグループに続いて動き出したか、、それにしてもあの精霊の食べたいきなこパンは麻薬のようなうまさらしいな？」

??? 「変なところに興味を持たないでください、博士。」

博士 「ああ、しかし君には期待しているよアステカのお嬢さん？」

シヨチトル 「私は自分の目的を果たすだけですの、、」

博士 「失敗と裏切りを許さない君はとても優秀だと思うのだから？」

タイプ・グレートテン

T G D 『博士、そろそろ動いてはどうですか？』

博士 「ふむ、他の連中も動き出すだろう。電話相手の主力駒であるバンダースナッチが大半、ベツレヘムの星の後始末に駆り出されている現状だ、上に押さえつけられている『反乱分子』が行動を起こすにはまたとないチャンスだろう。」

査楽 「そろそろ頃合い、ですかね？」

博士 「しばらく数式を愛でる暇も無くなりそうだ。」

side

??? 「浜面ー！ドリンクおっそーい！！」

浜面「へいへーい！ 分かつてるっつーの！ 急かすな麦野！」

麦野「あー絹旗ー箸とつてー」

絹旗「麦野、、また超シャケ弁ですか？ フレンダも鯖缶ばつかですな、、」

フレンダ「結局、鯖缶が最強つて訳よ！ だよねー滝壺！」

滝壺「、、南南西から信号が来てる。」

浜面（シャケ弁食つたり鯖缶食つたりやりたい放題だなくコイツら（？ームー）
それぞれの暗部は動き出していた。

1話 忘れられた精霊と魔術師になったヒーロー

（五河家）

十香は一人、持ち主の戻らぬ部屋に来ていた。

十香「シドー、、」

壁「ω・、）チラッ

耶俱矢「ねえ、十香あのままじゃヤバくない？」

夕弦「同調。十香は士道が居なくなつてからずっと病んでます。」

琴里「いつ暴走してもおかしくないのに、よく耐えてるわ。つて四糸乃は？」

七罪「さつき散歩に行つたわよ。」

士道の部屋の前で佇む十香を見て四人は心配していた。

みんな辛かったのだから、十香は最も辛かったのだろう。

最後まで一緒にいた上何も出来なかつた自分が許せないのだろう。

あの日から毎日、十香は士道の部屋に来ていた。

十香「シドー、、必ず帰ると言つたではないか、、」

壁「ω・、）チラッ

耶俱矢「どうしよう？話しかける？」

夕弦「提案。耶俱矢が言っではどうですか？」

七罪「耶俱矢がやるの？」

耶俱矢「うえ!!? こ、琴里が行きなよ！」

琴里「はあ!?! なんで私が、、」

七罪「ちよっ！琴里！声抑えー！十香「何をやっておるのだ？」

ああ〜あ見つかつちやった。」

壁から十香が四人をみつけ声をかけた。

琴耶夕『（>、A、）>ウワアア!!』

琴里、耶俱矢、弓弦はいきなりのもので倒れ込んだ。

琴里「と、十香、、」

夕弦「説明、耶俱矢が『十香が可哀想だから心配だよー』と言っていたので来ました。」

耶俱矢「うえ!!? 弓弦！何言ってるの!!? 確かに心配したけど、、」

十香は下を向き、琴里たちの方を向いて微笑んだ。

十香「心配をかけたな、、大丈夫だ！土道は必ず帰ると言っておったからな！」

琴里「十香、、」

p r r r r r r r !

琴里の電話が鳴った。

琴里「神無月？ 何かあったの？」

神無月『司令！ 四糸乃ちゃんが！』

琴里「四糸乃がどうかしたの？」

神無月『消失ロストしました！』

琴里「はあ!? 四糸乃が消失!?!」

理解できなかつた。土道に封印された精霊は隣界に帰ることは無い。故に四糸乃に霊力がほとんど戻ってしまつたということだ。

琴里「消失前の感情は!?!」

神無月「驚愕と悲しみ、少し絶望が混じつてます!」

琴里は走つて玄関へ向かつた。

琴里「もうツ!! どうなつてんーうわツ!?!」ドンツ

??? 「きやア!?!」

玄関で琴里は誰かとぶつかつた。

琴里「痛たたた、つて四糸乃!?!」

四糸乃「琴里、さん、」ウルツ

琴里「どうしたの四糸乃!?! それに霊装が、、、」

四糸乃「土道さんが、」

よしのん『そうそう！土道くんが天宮市に帰ってきたんだよ！』

琴里「!!」

琴里の中にふたつの感情が浮かび上がった。

ひとつは歓喜。土道が帰ってきたことの喜びだった。

もうひとつは疑問だった。何故、四糸乃は土道に会ったのに悲しみ、そして絶望の感情が湧いたのだろうか？

よしのん『でも、』

琴里「でも?」

よしのん『四糸乃が話し掛けても『君は誰?』って言ったの、』

琴里「は?」

よしのん『しかも、土織ちゃん姿で歩いてたし、何となくオーラっていうか本当に女の子って感じがしたんだよ!』

琴里は四糸乃の言っていることは理解できたが、整理が出来なかった。

四糸乃「土道さん、私の事、嫌いに(・・⊗ω⊗・・)」ポロポロ

四糸乃が泣き出した途端、周囲が氷り始めた。

琴里「四糸乃！落ち着いて！きつと人違いよ！」

神無月『司令!』

琴里「何なのよ! うっさいわね!」

神無月『アウフ、、、ありがとございます! それで、四糸乃ちゃんの霊力を感知した

のか、【魔術師】^{ウイザード}が1人接近してます!』

琴里「チツ、、、面倒ね、すぐみんなごと回収して!」

神無月『えッ? まさか、、、そんな、、、この魔術師は!?!』

琴里「何よ神無月! その魔術師、まさかメイザースなの!?!」

神無月『いえ、これは、、、士道くん、、、です、、、』

琴里「は?」

ドガアアアアアン!!!!

突如、四糸乃と琴里の前に何かが落ちてきた。

??? 「まさか、精霊から話し掛けて来ていたとはね？」

琴里 「あ、あんた、、、 士道、なの？」

そこには士道の女装した時の姿、士織がCRユニットを纏い立っていた。

士織 「《ハーミット》を発見。直ちに排除する。」

士織は手に持つ《ヴァルハリオン》を構えた。

2話 魔術師と精霊と救済する者

〔五河家前〕

琴里「土道、なの？」

目の前に現れた精霊の敵であり自分の所属組織と対立しているDEM社の尖兵である魔術師。だが、琴里はその魔術師をいちばんよく知っていた。義兄にしてラタトスクの最終兵器。

五河土道だった。(正確には土織ちゃんの姿)

土織「土道？ そんな名前じゃないけど、それより君は逃げて。そこに居る精霊という存在はとて危険なの。」

琴里「な、なに、言ってるの土道？ 四糸乃よ？ 覚えてないの!？」

土織「生憎、知り合いに精霊は居ない。それに君は精霊の味方をするのか？ 災厄の元凶を。」

琴里「災厄の元凶？、精霊を、殺すの？」

土織「そうしか方法はない。例えあったとしてもこつちの方が単純だよ。君が心配することでは無い。」

士織は四糸乃に近ずき《ヴァルハリオン》を振り下ろす。

琴里「ツ!! 【灼爛殲鬼】!!」ギイン

咄嗟に琴里は天使を顕現し士織の攻撃を止めた。

士織は2人目の精霊の出現に目を見開き、飛び退いた。

士織「驚いた、精霊同士が仲良く一緒に暮らしてるなんて、、」

琴里「本当に覚えてないの!？」

士織「覚えてない。　　というか今から1週間前からの記憶しかないの。」

琴里「1週間前、、ベツレヘムの星の時に!」

士織「前の私はどうだっか知らない。でも今の私は崇宮士織よ。」

琴里「たか、、みや?」

家から誰かがバタバタと出てきた。

耶俱矢「ちよっ、琴里!　　一体どうしー」

夕弦「驚、、愕、、　　士道、、　　ですか?」

士織「私がどう見えてるのか知らないけど、私は士道って人じゃない。

そもそもその名前、男じゃん!」

耶俱矢「士道、、　　悪い冗談はよせ、、　　我を覚えとらんのか?」

夕弦「疑問、何でそんな装備をしているのですか?」

士織「悪いけど君たちのことは覚えてないの。あとこれは私の専用C R—ユニットよ。それと、まさかと思うけど、君たちも精霊なの？」

琴里「耶俱矢！夕弦！今すぐ霊装を顕現して！」

耶俱矢「!? 士道を攻撃するの!? そんなの嫌よ！」

夕弦「拒否、夕弦も士道を気づつたくありません！」

琴里「士道より自分の心配をして！今のコイツは魔術師よ！」

耶俱矢「もう、どーなってるのよ！」

夕弦「困惑、やむを得ません。」

耶俱矢と夕弦は、拘束具のような霊装を纏い、四糸乃を守るように前に立った。

士織「4対1、厄介ってレベルじゃないけど、一人くらい殺つとかないと魔術師の名折れだわ。」

《ヴァルハリオン》を胸の前に構えて、再び戦闘態勢をとる士織に琴里と耶俱矢、夕弦が睨む。

耶俱矢「ラファエル【颯風騎士】エル・レム【穿つ者】！」

夕弦「ラファエル【颯風騎士】エル・ナハシユ【縛める者】！」

琴里「カマエル【灼爛殲鬼】！」

士織「フツ!!」

士織の持つ武器が3人の天使をはじき飛ばした。そして琴里の胸は大きく十字に斬られていた。

琴里「かつ……!?!」

士織「チツ、、切り損ねたか、、」

八舞『琴里イイイ!!』

あまりのダメージの大きさに灼爛殲鬼の回復能力も遅れていた。はじかれた天使を手に取り、琴里の前に耶俱矢と夕弦が立った。

士織「あのさあ、もつと本気出してくれない? 唯一まともに霊装纏えてるの《ハーミット》だけじゃん。」

耶俱矢「あんた、、、妹に何してんのよ!!!!」

夕弦「憤慨、流石に許せません!」

士織「私の家族はアイクとエレンだけ。前の家族は私を捨てたんでしょ?」

琴里「……ウエストコットとメイザースが?」

士織「そう。アイクは海で捨てられてた私を拾って大事にしてくれた。エレンは誰にも負けないように特訓してくれた。」

琴里「捨てたわけじゃない!」

士織「じゃあどうして助けてくれなかったの?」

琴里「それは……」

士織「私はアイクとエレンに恩返しができることは無いか？ って聞いたら、精霊を倒してくれって言われたの。だから、アイクとエレンのために精霊を全員、殺す！」

ドサツ

その音は玄関の中からした。

そこには士道から貰ったきなこパンの抱き枕を落とした十香がいた。

士織「その顔、、、《プリンセス》ッ！」

十香「シドー、、、？」

琴里「十香！ダメ！今来ちゃダメエエ！」

それは最悪な形の再会だった。

そして十香は問う。

十香「シドーは、、、私を殺すのか？」

士織「精霊である以上、私の家族のために殺す。」

『殺す』その一言は今まで十香を肯定し続けた士道の言葉ではなかった。初めて士道に否定された。初めて士道に敵意を向けられた。初めて士道に殺意を向けられた。初めて士道に『殺す』と言われた。

十香の心を崩すには充分すぎる一言だった。

ドゴオン!!!!
突然、爆風が土織を襲った。

??? 「こつちだ!」

琴里 「誰!」

耶俱矢 「きやあ!?! なにすんの!?!」

夕弦 「衝撃、きやー。」

四糸乃 「、、!?!」

よしのん 『ギャー!?! 不審者!?! 誘拐犯!?!』

2 「ちつたア静かにできねエのか? 精霊つてのはよオ!」

??? 「見えてるんだろ! ラタトスク! 回収しろ!」

突如現れた人影に抱えられ十香たちはフラクシナスの転送装置によってその場から
きえた。

士織 「チツ、、逃がしたか。」

??? 「心配いりません。最も厄介である『プリンセス』は貴女のおかげで動かなくなる
と思います。」

士織 「エレン、、ごめんなさい。お願いだからアイクに言わないで!」

エレン 「しかし惜しかったですね? 狙うのが『イフリート』でなく、『ベルセルク』の
どちらかなら、大きなダメージを与えられたはずです。」

士織 「そう、か。」

エレン「今日はもう帰りましょう。アイクも心配してます。」
士織「そうですね。」

士織とエレンは帰るべき場所、『DEMインダストリー日本支社』へと向かった。

3話 表の暗部と裏の暗部

くクシナス艦内く

耶俱矢「いたた、こゝこ、フラクシナス？」

夕弦「混乱、何が怒ったのですか？」

四糸乃「ううん、」

琴里「あんた！　なんでフラクシナスのこと知ってるのよ！

殿町宏人!!!」

琴里が指をさした相手はいつも土道と仲良くしてた「一般市民」殿町宏人だった。一般市民は精霊どころか、ラタトスクのことを知っているのはASTやDEMでなければありえないことだ。

殿町「まあ、方向は違うとはいえ天宮市の裏で働いてるんだよ。だから魔術師や精霊のことも隅から隅までつとこまでは行かないけどだいたい知ってるぜ！」

一方「オイ！　余計なこと喋ってねエで、さつさとクソ仕事の内容を説明しろ。」

琴里（なんでこんなに偉そうなの？　ここの司令、私よね？）

殿町は自分が暗部『グループ』に所属していること、上層部の命令の内容『精霊の救

出・DEMへの攻撃』を教えた。

琴里「つまり、最近DEMの存在が上層部にとって邪魔でしかないから、ボコボコにするって訳？」

結標「正確にはちよつとお仕置きするってだけ。」

殿町の後ろから赤髪ツインテールの女性が現れた。

そして、フラクシナスの司令官、五河琴里は思う。

琴里（コイツ！ キャラ被ってる！）

ふと、耶俱矢が何かを思い出すように声をあげる。

耶俱矢「ん？ 何か忘れてるような？」

夕弦「同調、夕弦もです。」

琴里「え？ 何かしら？」

四糸乃「あの、七罪、さんは？」

3人『あ！』

く五河家く

七罪「フツ、どうせ私なんか作者にすら忘れられる存在なのよ。フツフフフ……ハア、チクショー」

く再びフラクシナス艦内く

琴里「ご、ごめんなさいね？七罪……」

耶俱矢「その一悪かったな。七罪よ。」

夕弦「謝罪、ごめんなさい七罪。四糸乃が七罪のことを思い出させてくれました。」

四糸乃「その、説明中だったので、言い出しずらくて。」

七罪「よおおおしいいのおおおお!!! (？ ㄥ？ ;)」

一方「ビミョーな靈力反応はコイツだったのかア。」

殿町「分かってたんだったらなんで言わねーんだよ。」

一方「そんな時間なかったろオが。それより海原のバカはどこ行った？」

殿町「ああ、全員揃ったほいし、話すとしますか！」

一方「一名死にそオな目になってんだがソイツはいいのか？」

部屋の奥で体育座りをしている十香の目は、反転した時の折紙の目に近い雰囲気だった。

琴里「あー、今は1人にさせてあげて。」

一方「オオ、ンで？ 海原は何処だ？」

殿町「一応、上からの命令になってるんだが、そのついでにな？」

結標「五河琴里。貴女にも現場を見てもらうわ。」

琴里「私が？」

殿町「ああ、君の『おねーちゃん』の情報も手に入るかもしれないぞ？」
琴里「!! わかったわ。」

殿町はニイツと口の端を吊り上げ出口へ向かった。

殿町「オーケイ！ じゃあ残飯たのしのおしごと処理を始めるか！」

4話 捜査と妨害

「人材派遣の部屋」

殿町「数時間前に人材派遣マネジメントの部屋を搜索していた海原が武装した集団に襲われた。」

琴里「うわあ、酷い……」

琴里たちは海原光貴が消えた部屋に来ていた。

だが、そこは大爆発の後だった。そんなことがあればもちろん野次馬もあつまる。なので琴里たちはフラクシナスの転送装置を使って到着したのだ。

結標「丁寧に証拠を消しているわね。」

殿町「報告にあつたPCやHDD類が見当たらないな？ AI搭載の家電も無くなつてる。」

琴里「ちよ、ちよっと！」

さつさと中に入ってしまう殿町、結標、一方通行を小走りに追いかける琴里。いつも艦内で指示をしていた琴里が現場に向かうのは初めてなのだ。

結標「残っているものもあるわよ。旧型みたいだけど」

琴里「電子レンジ？」

結標はボロボロになった部屋のキッチンから電子レンジを見つけたらしく、呼びかけた。

結標「見て。中から1万円札が出てきたわ」

琴里「なんでそんな紙幣が？」

殿町「確か、偽造防止用ICチップが埋め込まれてたな。」

結標「海原の置き土産かしら？ レンジの中なら電波をシャットアウトできるし、一時的にセンサーを誤魔化せたかも。」

琴里「どこに目を付ければいいか分からないわね。精霊の対処とは全く違う。そういうえば、一方通行さんはどこに……」

一緒に入ってきていたはずの一方通行はいつの間にか姿を消していた。

一方「オイ」

部屋の奥から一方通行の声が聞こえた。その部屋に向かうと、一方通行はクローゼットの前に立っていた。

琴里「!？」

そのクローゼットの中には細身の青年がいた。否、押し込まれていた。

その青年の足にはまるで刃物に切り裂かれたような長方形の傷があった。

琴里「何、、、これ？」

殿町「海原の仕業だな。」

一方「足のソレは野郎の趣味か？」

殿町「アイツは人間の皮膚を使って1種の札を作る。お前たちは魔術を知らないから説明は省くが……要は他人とすり替わる事ができるスキルを持っているんだ。」

琴里「……魔術？」

殿町「琴里ちゃんの知っている魔術とは違って、海原や俺の魔術は原始的なものだからな。」

一方「……て事ア、あの変装野郎はまだ生きています。」

殿町「この男とそっくりに入れ替わって行動しているはずだ。」

琴里（そんなことができるだなんて……全く、この街の裏はどれだけ深いのよ……）

↓DEMSIDE

士織「ただいま戻りました、アイク」

アイク「ご苦労さま、士織。僕のために頑張ってくれたんだね。」

士織「いえ、まだまだです。それより……」

少し暗い顔になり士織は俯いた。

アイク「どうしたんだい？」

士織「前の私は精霊と知り合いましたか？」

アイク「そうだね……知り合いというよりも、家族みたいだったよ？でも可哀想だね
士織は。あんなに優しくしたのに捨てられてしまうなんて……」

士織「……でも、もうちよつと過去の自分についてに聞いてもよろしいですか？」

アイク「……士織、『好奇心猫を殺す』という言葉を知っているかい？」

突然、士織の頭に目を隠すぐらい大きなヘルメットのようなのが被せられた。

士織「なっ!? アイク!?これは……」

アイク「士織、君はなんの心配もしなくていいのだよ。僕のために動いてくれれば
……」カチツ

アイザックは手元にあるボタンを押した。

すると士織に被せられたヘルメットが青白く光り始めた。

士織「ああ!?!、あ、いくう、」バタツ

士織は無理矢理、脳味噌を掻き回されるような感覚に襲われ、その場に倒れ込んでしま
まった。

もうこんな世界は嫌だ。もうこんな自分は嫌だ。
俺なんて、

あれ？

俺の名前は？

確か、い*@亅士^：\$

なんで？ 思い出せない。

俺は誰だ？

目を開けるとそこには士、；の顔を覗き込む白髪の男性とノルディックブロンドの髪の女性がいた。

??? 「やあ、お目覚めかい？」

「あな、た、は？」

アイク 「僕はアイザック。 アイザックⅡウエストコット」

「おれ、は？」

エレン 「俺、ですか……今の貴女は女性です。言葉遣いに気をつけなければなりませんよ。」

アイク 「君の名前は『崇宮士織』そして僕たちはもう家族だ。」

「か……ぞく」

何も思いつけない彼女にとってその言葉は光に満ちていた。

海の真ん中に捨てられていたこと、自分が女性であることを全て聞いた。そして男、『アイザック・ウエストコット』は、ここに居ていいと優しく微笑んだ。彼女はその言葉を信じた。もう捨てないと、誓まで立てさせた。

その笑顔の裏には影ホンモノが黒い笑みを浮かべていたことも知らずに。

く現在く

士織「……………ん？……………ううん」

エレン「起きましたか？士織」

士織「……………エレン……………うう…まだ頭が痛いな。」

起き上がろうとした士織は頭を抑え、エレンは士織をゆつくりと寝かしつけた。

エレン「先程の戦闘が原因でしょう。安静にしていなさい。」

士織（そういうえば、さつきまですごく気になっていたことがあったと思っただけだな……………）

布団をかぶりながらみようにモヤのかかった思考を回転させると、エレンは士織の手をそつと握った。

エレン「心配事があるなら聞きますよ、私は仮にも貴女の『母親』なんですから。」

士織「エレン……………ううん、大丈夫。ありがとう。」

エレンの微笑みは士織の心を安心させた。

そして、『いつも』の崇宮士織に戻っていった。

くマネジメント
人材派遣の部屋く

一方『人材派遣』を乗せた護送車が襲撃されたア？

殿町『人材派遣』は死亡。ヤツ本人から聞く線は無くなっちゃったな

琴里「……」

淡々と恐ろしい話しをしていながらパソコンを打ち続ける殿町。

一方、特に士道の情報を得られなかった琴里は次の手を考えていた。

結標「紙幣そつちの方はどう？」

殿町「ヒットしたぞ」

タンツとエンターキーを叩きパソコンを見せた。

琴里「……これって？」

殿町「『人材派遣』の商品リストだな。取り引きされたのはプロのスナイパーが一人、名前は『砂皿すなざらちみつ緻密』プロフィールについての真偽は不明。ただ紹介料だけで70万ってことは結構な『目玉商品』なんだろう。」

結標「武器はMSR-001。最新型の磁力狙撃砲ね。」

琴里（そういえば火薬を使わないからブレがなく音もしないって、神無月が言ってた気がするわね。なんでそんなモノを知ってるかは聞かなかったけど……）

再びパソコンを戻し目にも止まらぬ早さでタイピングしていく殿町。

殿町「取引相手のデータは……」

何度かスクロールさせ画面を凝視する殿町は諦めたようにため息をついた。

殿町「……ダメだ残ってない。だが、この見取り図は『天宮クイネット中央広場』か

間近に講演のために貸し切ってる統括理事がいるな。恐らくそいつが標的だ」
ターゲット

琴里「その講演会って『大天宮際』だいてんぐうさいに向けての講演会？」

殿町「そうだ、そしてその講演会には何故かVIPである『岡峰最中』おかみねもなかが参加している。」

一方「……講演会だア？」

暗部組織《グループ》と対精霊組織《ラタトスク》の《フラクシナス艦司令官》五河琴里は襲撃されるであろう講演会についてパソコンを覗いた。

殿町「琴里ちゃん、転送装置ってどこまで飛ばせる？」

琴里「え？確か、制限はなかったはず……」

ガタツと音を立て一方通行が立ち上がった。

一方「オイオイ、スナイパーとおいかっけこでもするつもりかア？面倒臭エ事やつてねエでつまんねエ講演会の方を中止させりやイイじゃねエかよ」

殿町「いいや、残念なことに、講演会はもう始まつてる。」

く天宮クインテットく

岡峰「皆様、こんにちは。統括理事が一人、岡峰最中と申します。今回は『大天宮際』についてお話ししたいとおもいます。今年の天宮際は謎の事件によって大変皆様にご迷惑をおかけしました。なので、今年の大天宮際は……」

百人程集まった広場の先のステージで岡峰最中は喋り始めた。

そして周りには大きな黒い車が4台囲むような形で止まっていた。

およそ、10メートル程離れたビルの10階ではスコープ越しで講演会を見ている影があった

殿町「狙撃可能地点はおよそ十五カ所、一つ一つ潰していくしかないな、早急に」

一方「やる気がねエ警備だな。同じ統括理事でも潮岸の野郎は四十六時中ワイヤリングスーツ着込んでんのによオ」

琴里「何それ、馬鹿みたい極端ね？」

殿町「確かになありやビビりすぎだけどな。それに一応テロ対策にASTもいるし、何よりあれが強力だな」

殿町が周りを囲む黒い車を指さした。

ウインドディフェンス

殿町『妨害気流』あれはVIPの周辺に突風を発生させて狙撃の狙いを反らせる装置だ。特殊車両で会場を取り囲んで風の渦を作ってたんだろう。」

その後2人は琴里を忘れ話し始めた。

琴里（この人たちは自分のやるべきことがある。だからいつまでも頼って居られない、胸の傷の痛みももう治まった。早く土道を取り戻さないと！）

再び決意し強く拳を握った。

突然一方通行と殿町が琴里の影に隠れた。

琴里「ちよ！何してるの!？」

殿町「…流れ弾が飛ばないように気をつけなけないな」

一方「あア…」

琴里「…はあ？ ん？あれは……」

琴里の視線の先には元AST隊員鳶一折紙の後輩岡峰美紀恵の姿があった。何やら妙に強ばっていた。

（美紀恵 side）

美紀恵（折紙さん、…、なんで脱退しちゃったんですか？私の目標だったのに、…、追いつきたい場所だったのに、…）

燎子「なに、腑抜けた面してんの？」

美紀恵「日下部隊長!?!なんで!?!っていうか足大丈夫なんですか？」

私に話しかけてきたのは我が部隊の頼れる隊長、日下部燎子隊長。

先週の大きな事件によって隊長は足に怪我を負って回復するまで部隊のバックアップをしてもらってます。

不思議な力の影響で《治療顕現装置》メデイカルリアライザが効きずらいそうです。

燎子「ええ、なんとか元気よ。ごめんなさいね、折紙が抜けたばかりなのにこんな怪

我しちゃって。」

美紀恵 「いえ！お気になさらないでください！」

隊長が暗い顔してる!? 珍しい。それ程責任を感じているのでしょうか？

なら！

美紀恵 「大丈夫です！私が隊長の分まで、いえ！それ以上に頑張ります！」

燎子 「ははっ！頼もしいね！言ったからには頑張るなよ？」

美紀恵 「はい！了解です」 ドッゴオオオオン

!!!!

突然爆発が起こった。

美燎 『……は？』

く数分前く

琴里 「あれは……」

殿町 「琴里ちゃんも知り合い見つけたのか？」

琴里 「いえ、こちらが一方的に知ってるだけよ」

一方 「オイ！あの『妨害気流』ウインドレイフエンス動いてねエぞ！」

一方通行が指を指す『妨害気流』は、スイッチのような所にいくつか凹みがあった。

殿町 「ッ!? 砂皿だッ!!」

琴里「どこ!？」

一方「チツ！」

いきなり一方通行が近くにあつた車に走つた。

琴里「ちよつと！一方通行さん!?!?!え？」

一方通行が車のボンネットを殴つたかと思いきや、彼の腕が車体にめり込んだ。

直後一方通行を巻き込んで爆発が起きた。

琴里「きやあああああ!?!」

殿町「ツ!! ああ馬鹿ツ!!」

〜1時間後〜

殿町「もう少し穩便に済ませられなかつたのか？」

一方「面倒臭エンだよ。」

一方通行、殿町、琴里は無事だつた。3人とも爆発に巻き込まれたのに生きていたのは一方通行の能力『ベクトル操作』で3人を守つたからである。

フラクシナス（修理中）に戻つてきた琴里は何も得られなかつたことに落胆する。

ついでに一方通行や殿町、結標の能力を精霊たちに説明したところ、耶俱矢が異常に悔しがつていた。

琴里「絶対に救つて見せるわ！待つてて、おにーちゃん！」

（砂皿 side）

突然爆発が起きて講演会は中止、目標は殺る前に逃げられてしまった。

砂皿「ツ!! くそっ!」

??? 『失敗したか? 引き上げだ』

砂皿「!?!」

耳に着けたインカムから呆れたような、だがどこか楽しそうなくぐもった声が響いた。

砂皿「まだだ!!」

??? 『何度も言わせるな。引き上げだ』

最後の言葉に威圧を感じた。

砂皿は怒りを収め悔しげにスナイパーライフルを機器から外した。

6話 trap to use member

↳DEM社 模擬戦闘室↳

士織「ハア…ハア…」

エレン「この短期間でここまで成長するとは…ともあれお疲れ様です、士織」

汗を拭い、CRユニットを解いて膝に手をつく士織にタオルを渡す。

士織「ありがとう、エレン。やっぱりエレンには全然敵わないや」

エレン「いえ、たった1週間でここまで成長出来たのは貴女が努力を怠らなかつたからです。アデプタス2の称号を与えてもいい頃合ですかね」

???「ソレはどういうコトですか！」

大声を出して入ってきたのは先日崇宮真那に敗れ、命を落としたように見えたアデプタス3、ジェシカ・ベイリーである。

しかしその姿は異様であった。右目に眼帯を付け左腕は銀色に鈍く光る機械の腕であった。

そう、彼女は《スカレット・リコリス》の活動限界により、様々な身体の機能を低下させ、それを補うためにサイボーグとなった。

ジエシカ「認めない！2度もソノ座をワタシから奪うのか！東洋の小娘！しかモ崇宮だト！」

士織「え!?そんなこと言われても…」

エレン「貴女の実力が足りないだけの問題です。士織のほうが貴女よりよつぽど強い。」

ジエシカ「クツ…」

エレンの言葉に苦虫を噛み潰したような顔になり、士織を指を指す。

ジエシカ「ナラ、ワタシと勝負しなさい!!」

士織「え、えええ」

めんどくさい先輩に絡まれちゃった。

どうしよう!?

くワゴン車く

アナウンス『第二十三学区でクラッキングを確認！航空宇宙工学研究所付属の衛生管理センターが電子攻撃を受けています』

一方「衛生だとオ…?」

今、ワゴン車には新たに加わった精霊、誘宵美九と鳶一折紙と八舞姉妹、四糸乃、七

罪、そして五河琴里、グループのメンバーが乗っている。ちなみに十香はまだ立ち直れないため、安全なフラクシナス（修理中）にいる。

一方「面白そオになつてきたじゃねエか…」

琴里「この場合はどうするの？ ウイルス保管センターの方もあるし…」

殿町「対策チームは右往左往、ま、どっちかは困だろうが。」

殿町が二本の指を立ててそのうちの一本を片方の手で折り曲げる。

一方「クソどもの策に付き合わされるのは性にあわねエ」

ガンツと車の扉をこじ開け、一方通行は飛び降りた。

殿町「一方通行の野郎、勝手に行動しやがって…」

結標「彼ひとりじゃ心配ね。八舞姉妹、ちよつと追いかけてくれるかしら？」

夕弦「呼応。分かりました。」

耶俱矢「カカカ、我ら颯風の巫女に追えぬものなど…え？ 待つてアイツ速すぎない？」

折紙「問題ない。私の《絶滅天使》メタトロシならすぐに追いつく。」

琴里「じゃあ、折紙もお願い。アイツがやられることなんて有り得ないけど、万がーのために、ね？」

折紙は限定霊装を展開させ八舞姉妹を連れて瞬間移動した。

「……………」

一方「残り時間10分弱、大物アーティスト並のスケジュールだな……」

海原との通話を終え、アンテナを破壊に向かう一方通行は、首のチョーカーに電源を

入れ……

???「おやおや、これはいけませんね」

られなかった。正確には何者かに一方通行の腕が掴まれ、スイッチまで届かなかった。

一方「!!」

ポケットから拳銃を取り出し、声のする方へ銃口を向ける。

しかしそこには誰もおらず、一方通行を混乱させた。

一方「…!?!」

???「それが貴方の弱点ですね？」

拳銃を持つ左手を掴まれついに攻撃手段を失った。

???「どんなに強い能力でもスイッチさえ押さえてしまえば発動できないんですよ」

ガツツ!!!

ジャンパーをきた男が一方通行の頭に『棒』を振り下ろした。

一方「オマエ…ブロックか!?!」

査楽「わたしは『メンバー』です」

7話 精霊と能力者

〔衛生管理センター付近〕

耶俱矢「ちよ！ アイツやられてんじゃん！」

夕弦「迂闊、スイツチを押さえてしまえば一方通行は戦えません。」

折紙「…」

耶俱矢、夕弦、折紙の3人はコンテナの陰に隠れ、一方通行と査楽のやり取りを覗いていた。

耶俱矢「ねえ、アレ助けた方がいいかな？」

夕弦「参戦、夕弦たちの実力の見せどころです。」

折紙「待つて彼は…」

八舞『《颯風騎士》』

バンツ!!

八舞『…へ?』

折紙「…」

姉妹は呆気に取られ、折紙は離れた場にいる2人を凝視し

死角移動の能力を持つ男は一方通行の後ろで倒れた。

査楽「…かハッ!？」

一方「他人の背後に回ることしか出来ねエ空間移動系能力者、《死^{キル}角^{ポイント}移動》とでも呼ぶ

べきか？

自分で1次元上の計算ができねエから他人の位置情報を元に補強してもらわねエと能力の発動も出来ねエ：身に余ってンぜ？その力」

査楽「電極に頼る貴方には言われたくありませんがね…」

耶俱矢「なによ、楽勝じゃない」

夕弦「完勝、流石一方通行です。」

査楽が膝をつき一方通行を睨むと後ろからそんな声が聞こえた。

好機チャンスだった。自分の能力に対処できるのは超能力者レベル5か自分を超える空間移動系能力者しかない！

査楽は折紙の後ろに回り込み、木刀だと思われていたものから鋸を抜いた。

査楽「…貴女に何の罪もありませんが大人しく私の人質になってください。」

折紙「…」

一方「…」

耶俱矢「…」

夕弦「…」

焦る査楽を全員が糸目で見た。

まるで残念な者を見るように。

查樂「ははッ!! 流石の一方通行でも人質を取られては迂闊に動けませんね!」

光劍^{カドゥール}

歌うような綺麗な声が聞こえた。

その瞬間、光の剣が查樂の傷口を貫いた。

查樂「あがッ!」

元々銃弾で貫通していた足をさらに傷口より大きな攻撃が抉ったのだ。

耶俱矢と夕弦は哀れみの目を送った。

折紙「私に触れていいのは土道だけ。いまは彼を助けるために行動している、その邪魔をするあなたの存在は不愉快、消えて。」

查樂「ひッ!! せ、精霊だと!」

巡回員「おい、そこで何をしている。」

夕弦「絶妙、バッドタイミングです。」

またも、巡回員を盾にした。

一方「そんなもんじゃ盾にもならねエよ」

耶俱矢「フッ、貴様の様な小物など眼中に無い。そもそも我らの目的は天に届く空中線の破壊のみだ。」

夕弦「説明、貴方に用はありません。目的は衛生アンテナです。」

一方通行は査楽に銃口を向け、耶俱矢と夕弦は呆れる。

折紙は査楽に触られた手首を念入りにハンカチで拭いていた。

査楽「この状況で私を撃つならやめておいた方がいい、その銃の照準は左右にかなりズレてますよ？ あとその精霊さん、謝りますからそれ以上はやめてください。流石の私でも傷つきます……」

一方「（あん時か……）美学が足りねエなア……悪党の美学つヤツが全く足りねエよ、オマエ」

ガンツ!!

査楽「ぐあア!!」

一方通行は自らの頭部に銃を撃ち込んだと思えば、弾丸は査楽の肩に直撃する。

耶俱矢「え!! 何それ、どうやったの?」

夕弦「嘩然、能力の説明を聞いていなかったのですか?」

耶俱矢「聞いてたし! その、あれよ! 今のは反射だ! だよね!!」

一方通行は溜息をつき耶俱矢を糸目で見た。

一方「間違っちゃいねエが、足りねエな、一度俺の体を介して弾丸のベクトルを操作しちまえば確実にお前だけを撃ち抜ける。」

俺の力の精度は銃の照準なんかとは比べ物にならねエンだよ。」

耶俱矢「…へえー」

夕弦「叱咤、耶俱矢がわかったフリをします」

耶俱矢「んなッ!? フリじゃないし! ちゃんと理解したし!」

一方「漫才なら他所でやれや…」

一方通行は耶俱矢と夕弦を見て溜息をつき、いつの間にか撃ち抜かれた肩の傷口がさらに大きくなった査楽を見下した。

一方（あの天使の精霊、また傷口撃ち抜いたな…）

査楽「クソッ…」

辺りを見渡し、人を探す。

だがどこにもおらず、そこにいるのは三人の特殊災害指定生命体と学園都市最強の超能力者だった。

一方「イイゼ」

査楽「…ひッ」

一方「逃げろよ豚、誰の後ろへ回ろオが、どこへ逃げよオが俺は必ずお前を撃ち抜く。」

そいつを肝に銘じて恐怖しろ。
コレが超一流の悪党だクソ野郎」

8話 素粒子工学研究所 『スクール』 ①

DEM模擬戦闘室へ

エレン「ん？ 終わりましたか士織」

士織「はい… 本当にこの人がアデプタス3だったの？」

ジェシカは機械でできた腕を破損し、己を守るCRユニットもほとんど意味をなさないくらい叩きのめされたのだ。

エレン「この程度ならもはや下っ端と同じですね」

にやんにやんにやんにやん♪???

間抜けな猫のようなアナウンスが聞こえた。

アイク『アデプタス1、2に告ぐ直ちに素粒子工学研究所へ向かいスクールのピン

セット強奪活動の支援をせよ。』

わんわんわんわん♪?

士織「…ねこ？ いぬ？ というかピンセットって何？」

エレン「おや、まだ士織はご存知なかったのですね。正式名称は「超微粒物体干渉吸引着式マニピュレーター」 磁力、光波、電子などを利用して素粒子を掴み取る事ができ、

故にピンセットと呼ばれるのです。

当初はクローゼットほどの大きさの金属製の箱なはずですが装置が巨大な理由は盗難防止のためらしいです。しかしもつとコンパクトにできるらしいですよ。(wiki 参照) それから——」

士織「：いや、もういいよエレン、私には理解できない：」

二人は会話をしながら歩を進めていた

出口に差し掛かったところで、アイザック・ウエストコットがキャリアケースを持って壁にもたれていた。

アイク「やあエレン、士織。君たちに渡しておきたい最新技術搭載の武器があるんだ。受け取ってくれるかい？」

エレン「最新の：一体どのような？」

アイザックは不敵な笑みを浮かべるとキャリアケースの手すりにあるボタンを押した。

士織「これは!？」

アイク「今回『スクール』のリーダーから提供されたこの世にない物質『未元物質』^{ダークマター}利用した対能力者用顕現装置、通称『未元顕現装置』^{ダークマター}。エレンにはロンゴミアント、士織にはヴァルハリオンのそれぞれに多彩な機能を施した。」

エレン「ほう…」

士織「ありがとうございます、アイク!!」ニコッ

エレンは目を細めて差し出された装置を品定めし、士織は可愛らしい笑顔で礼を述べた。2人の装着端末にデータをアップロードし、エレンがキャリーケースを持って会社を後にする。

アイク「…健闘を祈るよ、2人とも」

素粒子工学研究所

垣根「これが『ピンセット』ニヤリ

ドゴーンツ!!

垣根「…なんだア?」

心理「恐らく『アイテム』あたりじゃないかしら、どうする? 誉望くんじゃ第4位には勝てないんじゃないの?」

垣根「まあ、アレだ。誉望には悪いがDEMの助っ人が来るまで耐えてもらうしかない。オレの『未元物質』^{ダークマター}を提供してやった訳だし、何とかあの『原子崩し』^{マルチタウナー}止めてくれりゃいいんだけど。オレが相手して『ピンセット』が壊れちゃ元も子もねえ」

心理「つまり、今のところDEM任せって事ね。」

垣根「ま、大丈夫だろ。世界最強が来てくれんだからさ……」

く壊れかけの研究所内く

フレ「アチャク」

絹旗「超派手に殺りましたね。」

大爆発の犯人『麦野沈利』が手に持っているシャンプーハットのようなヘッドギアにフレンドが気がつく

フレ「そのヘッドギア正規メンバーでしょー？捕まえて『スクール』の情報吐かせりや良かったのに……」

麦野が手に持ったヘッドギアを指さしてフレンドが指摘するも、殺した本人はつまらなさそうに悪びれる様子もなくクルクルとヘッドギアを腕で回しながら

麦野「こいつ能力で姿消したりして地味に面倒だったのよね。イラツと来たからついね☆悪い、悪い」

垣根「おうおう、誉望のヤツDEMのヤツらが来る前にお陀仏か？ま、誰が何人死のうがオレには関係ねえが、オレの邪魔するってんなら潰すぜ。」

呑気に会話をしていると、扉の奥から垣根帝督が姿を現した。

麦野「テメエは…第二位の『未元物質』ツ!!?」

垣根「なあ、能力名で呼ぶんじゃねえよ。アイツと一緒に腹立つんだよ」
ピリ

気に触れたのか、垣根の周り圧が増し空気が音を立てる。

フレ「ちよ！ アイツ第二位なんでしょ!!? 勝機あるわけ!!?」

絹旗「正直超絶望的状况なのは？ 麦野どうします？」

麦野「どうするも何も、例の『ピンセット』の回収ができれば後はズラかるだけだ！

滝壺、体晶は？」

滝壺「…いける」(、ω、) bグッ

すると、垣根は「違う違う」とヒラヒラ手を振った

垣根「オマエらの相手はオレ様じゃねーよ」

麦野「あ？ 何言って——」

ドツゴオオン!!

突如、麦野と垣根の間に大爆発が起きた

否、何かが落ちた

麦野「クソツ！ なんだ!?!」

滝壺「…能力者、でもこれは『未元物質』?」

砂埃が晴れ爆煙の中心にいる人物が姿を現す。

??? 「目標地点に到達、見たところ『アイテム』というのはそっちの四人だね？」

巨大な剣を背中に携え青みがかつた長髪がなびく。

可愛らしい幼さを残した顔とは似合わない巨大な大砲を構えた。

??? 2 「4対2、『超能力者』までいると厄介ですが、あとの3人は問題ないでしょう。

士織は『原子崩し』の相手をお願いします。」

こちららも美しい顔、体格をしながらも身に纏う機械や中に浮かぶ小さな丸型の大砲が異様な空気を漂わせる。

士織「了解、『超能力者』の第4位『原子崩し』メルトダウナー 麦野沈利、貴女を排除する、そこから動かないで。」